「母語である日本語」の再発見

2022.2.22

第13回産業日本語研究会・シンポジウム

グローバル化が進む中での産業日本語

～様々な日本語使用者間のコミュニケーション～

森 篤嗣（京都外国語大学）

2　産業日本語と学校教育

- 人間が理解しやすく機械が処理しやすい日本語（「産業日本語」）を学校教育でどう扱うか？

→「産業日本語教育」の模索

- 言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

（2018年告示中学校学習指導要領国語科目標）

3 国語科における「人間が理解しやすい日本語」への取り組み

- 経験したこと，感じたこと，考えたことをまとめ，人に伝えるために，わかりやすく効果的に話し…

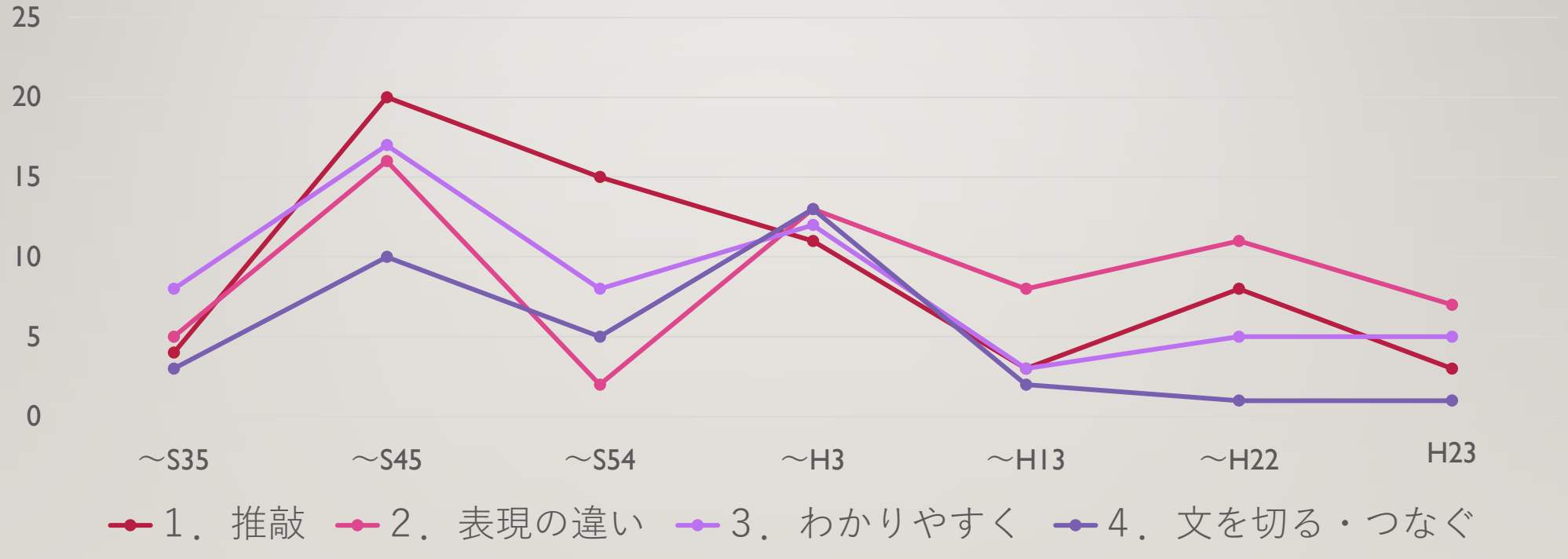
（1958年中学校学習指導要領国語科）

- 読み書きのスキル学習（輿水1962）

→経験主義から能力主義へ（中村2020）

→「書き換え」や「言い換え」を扱った教材調査（小学校教科書1,285冊）（森2013）

4 小学校教科書における「書き換え」や「言い換え」の推移



森（2013）より

5 日本語から日本語への書き換え１（小5：2002光村）

- 「三島さんはパンフレットを作るために町の歴史を調べています。資料に，次のような記述がありました」

かつて，遊水地として利用されていた町の中心部は，地下鉄開通以来，けんか有数のベッドタウンとなった。駅前には，ショッピングセンター，各種文化施設も整い，快適な生活環境となっている。

6　日本語から日本語への書き換え２（小5：2002光村）

- 「分かりやすく書き直すために，次のような工夫をしてみました」

1. 調べた言葉の意味を，「注」の形で入れる。遊水地（こう水のとき，川の水かさが急に増えないように，一時的に水をためておく場所，「遊水池」とも書く。）
2. 易しい言葉に置き換える。県下有数→県の中でも取り立てて数えられるほど（すぐれた）
3. 身近で分かりやすい具体例を示す。各種文化施設→町立図書館，教育センター，町民体育館などの施設

7 日本語から日本語への書き換え３（小5：2002光村）

- 町の中心部は，昔は遊水地（こう水…）として利用されていた所です。ここは，地下鉄が開通してから，県の中でも取り立てて数えられるほどにぎやかなベッドタウンになりました。駅前には，ショッピングセンターや，町立図書館，教育センター，町民体育館などの施設もあって，たいへんくらしやすい環境となっています。

森（2013）より

8 論理国語「１性格」

- グローバル化や情報化が進むこれからの社会においては，立場や考えの異なる他者との的確な意思疎通や共通理解，課題を発見しその解決を導いていくための創造性や合理性を重視した他者との協働などがより重要になると考えられる。

（2018年告示高等学校学習指導要領解説）

9 論理国語「３内容 書くこと」

- 個々の文の表現の仕方や段落の構造を吟味するなど，文章全体の論理の明晰さを 確かめ，自分の主張が的確に伝わる文章になるよう工夫すること。

（2018年告示高等学校学習指導要領国語科）

→疑問①：「人間が理解しやすい日本語」については過去にも取り組みがあったが必ずしもうまくいっていない。今度は？

→疑問②：日本語だけを見ていてうまくいくのか？

10 「機械が処理しやすい日本語」への取り組み

- 産業日本語＝人間が理解しやすく機械が処理しやすい日本語

1. 人間が理解しやすい日本語→国語科でも長く取り組みがあり，新たな動きも
2. 機械が処理しやすい日本語→取り組みの前例がない。外国語科（「論理・表現」）や情報科（「コミュニケーションと情報デザイン」「情報の発信とコミュニケーション」），公民科（「公共」）などとの関連で扱う？

二重の単一言語主義

- ある国家や地域において，ただ1つの言語のみが使われているとき，それを単一言語主義（monolingualisme）と呼ぶ。日本は，二重の単一言語主義に特徴づけられる。すなわち，国内言語としては日本語のみが，国際言語としてはほぼ英語のみが重視されている。これは，教育政策においてとりわけ顕著である。

大山(2016:4)

12 複言語主義と多言語主義

- 複言語主義（**plurilingualism**）＝個々人が持つ能力・価値
- 多言語主義（**multilingualism**）＝ある社会において，いくつかの言語が共存している状態

→日本の単一言語主義は国家の社会制度として多言語主義を否定し，複言語主義に基づく個々人の価値観を得る機会を奪っていると解釈できる。

13 二重主語構文・ウナギ文・主語消去型主題構文の機械翻訳（英語）

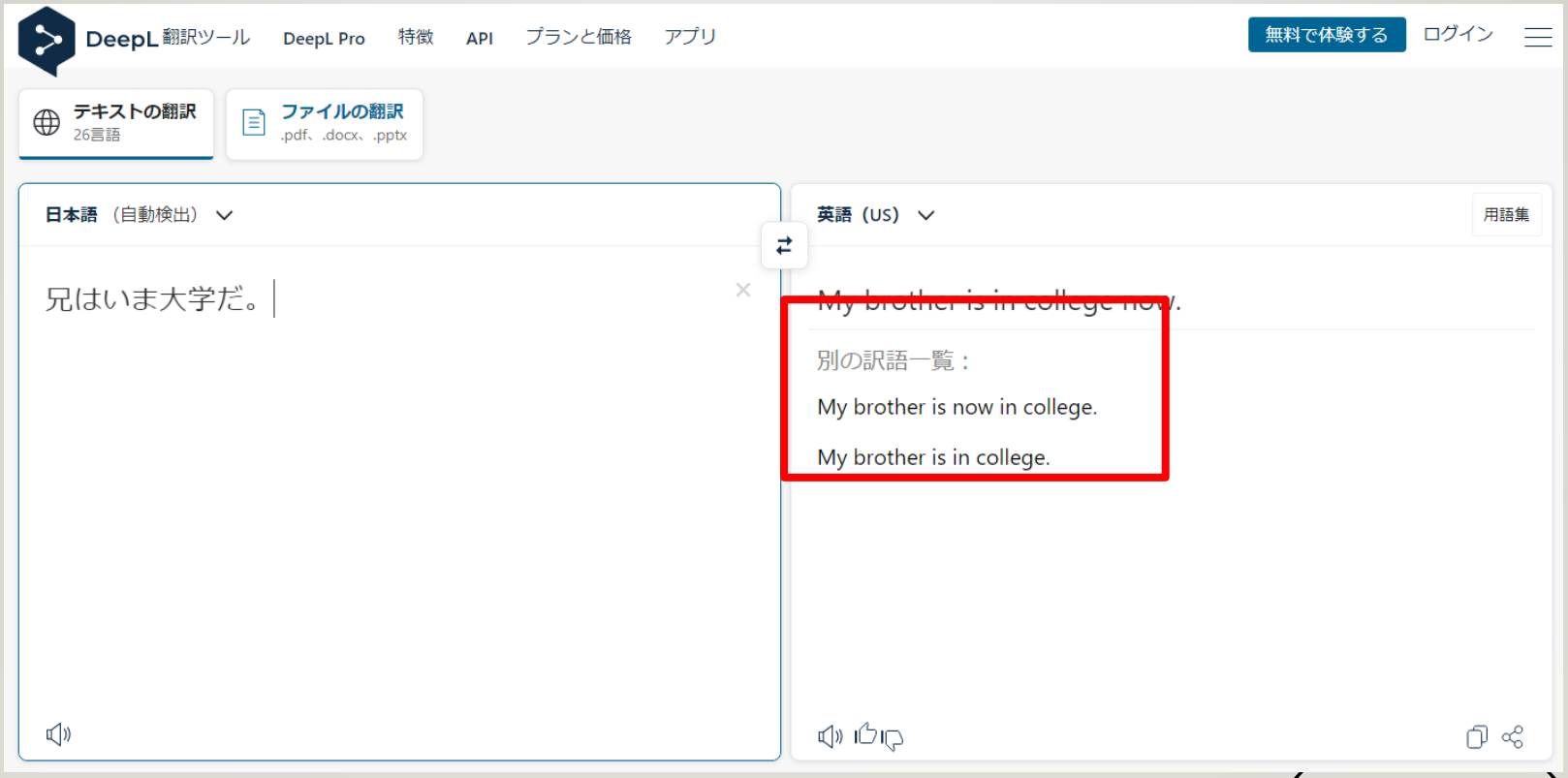
原文	Google翻訳	DEEPL	Weblio翻訳
象は鼻が長い。	Elephant has a long nose.	Elephants have long noses.	Elephants have long trunks.
私の学校は制服です。	My school is a uniform.	My school has uniforms.	My school has uniforms.
父の仕事は先生でした。	My father's job was a teacher.	My father's job was as a teacher.	The work of father was a teacher.
あの映画は眠かった。	That movie was sleepy.	That movie made me sleepy.	That movie was sleepy.
頭が痛い。	head hurts.	My head hurts.	Have a headache.
この店はコーヒーが美味しい。	Coffee is delicious at this shop.	This place has great coffee.	In this shop, coffee is delicious.
兄はいま大学だ。	My brother is in college now.	My brother is in college now.	The older brother is a university now.

14 二重主語構文・ウナギ文・主語消去型主題構文の機械翻訳（中国語）

原文	Google翻訳	DEEPL	Weblio翻訳
象は鼻が長い。	大象的鼻子很长。	大象的鼻子很长。	象的鼻子长。
私の学校は制服です。	我的学校是校服。	我的学校有一套制服。	我的学校是制服。
父の仕事は先生でした。	我父亲的工作是教师。	父亲的工作是老师。	父亲的工作是老师。
あの映画は眠かった。	那部电影很困。	那部电影让我昏昏欲睡。	那场电影感到困了。
頭が痛い。	头疼。	我的头很痛。	脑袋痛。
この店はコーヒーが美味しい。	这家店的咖啡很好喝。	这里的咖啡很不错。	在这家商店，咖啡味道好。
兄はいま大学だ。	我弟弟现在上大学了。	我弟弟现在在大学。	哥哥现在是大学。

※日本語の原文候補は森山・梅原（2009）を参考にした。

15 複数の訳語の提示



（DEEPL）

産業日本語教育としての日日翻訳（「日本語の再発見」から「書き換え」へ）

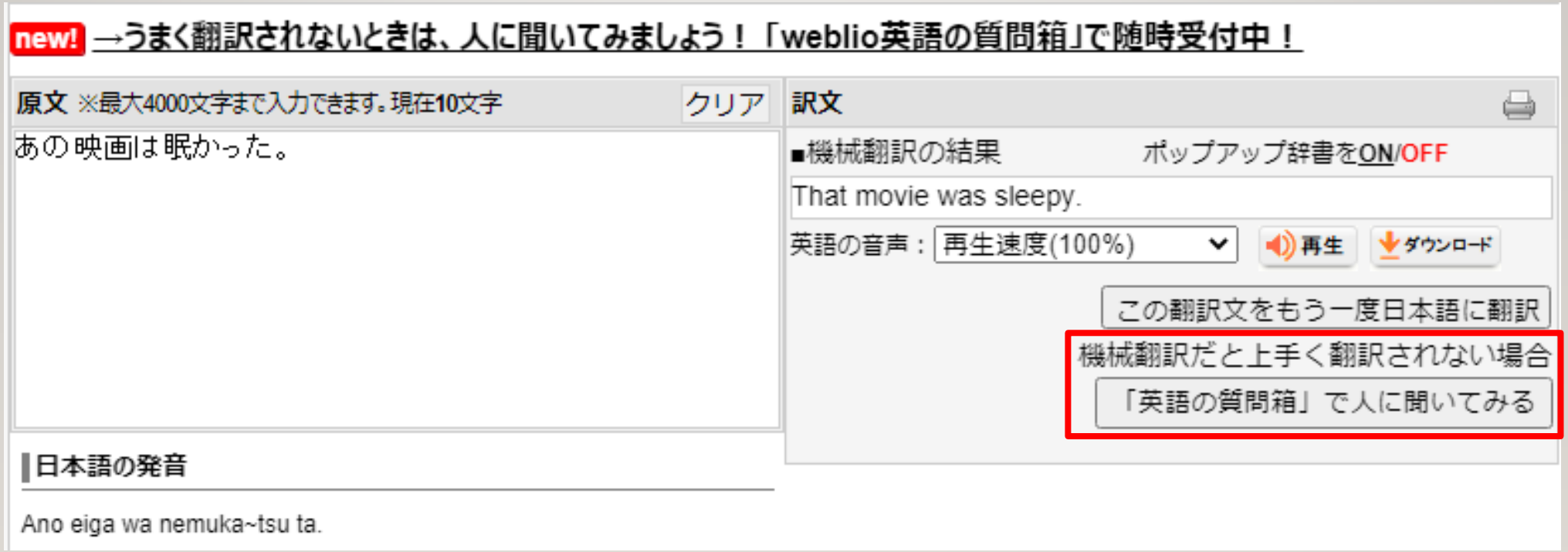
- 象は鼻が長い。→象は長い鼻を持っている。
- 私の学校は制服です。→私の学校では制服を着ると決められています。
- 父の仕事は先生でした。→父は教師をしていました。
- あの映画は眠かった。→あの映画はつまらなったので，私は眠くなった
- 頭が痛い。→私は頭痛がする。
- この店はコーヒーが美味しい。→この店のコーヒーは美味しい。
- 兄はいま大学だ。→兄はいま大学に行っている（のでここにいない）

※書き換え例はあくまで一例です

「日本語の再発見」と熟練ユーザー化

- 「産業日本語」の研究は、明瞭な日本語文の作成、高品質な翻訳文の作成コスト低減などにつながるものです。
  →学校教育によって，日本語母語話者を技術を理解した熟練ユーザー化することができないか（技術への歩み寄り）

18 「人に聞いてみる」というサジェスチョン



（Weblio翻訳）

言語の相対化と「日本語の再発見」→産業日本語教育

- 他の言語と相対化して，日本語の構造や表現に改めて「気付く」ことで学ぶ（「日本語の再発見」）
- 技術の革新にだけ頼るのではなく，技術に寄り添う発想を学ぶ（「日本語を調整する」「知識共有」）
- 言語の相対化は，文化の相対化でもあることを学ぶ（「お疲れさまです」「お世話になっております」「よろしくお願いします」）

20 補遺：「ありがとう」と言わない重さ（中3三省堂）

- この教材は「ありがとう」という言葉の使用頻度や場面を日本やアメリカと比較し，モンゴル人にとって「バヤルララー（ありがとう）」と口に出すのは「わざとらしい」ことであると説明している。
- 感謝は恩を胸に刻み，将来に具体的な行動で恩返しするのが誠意であるというモンゴル人ならではの価値観を解説している。
- 言語と文化の相対化を学ぶ教材として興味深い。

21 参考文献

- 大山万容（2016）『言語への目覚め活動：複言語主義に基づく教授法』くろしお出版
- 輿水実（1962）『国語スキルのプログラム学習』明治図書
- 中村敦雄（2020）『国語科教育における能力主義の形成過程：輿水実と近代化の精神, 1931-1977』渓水社
- 森篤嗣（2013）「「やさしい日本語」と国語教育」庵功雄，イ・ヨンスク，森篤嗣(編)『「やさしい日本語」は何を目指すか―多文化共生社会を実現するために』ココ出版，pp.239-257
- 森山卓郎・梅原大輔（2009）「英語と日本語の「主語」を考える」森山卓郎（編）『国語からはじめる外国語活動』慶應義塾大学出版会